

日本の新しい形をつくる 連理の会

日本は、平安の昔より海外からの渡来文化を日本独自文化に昇華させ、高い文化性と豊かな精神性を育みながら歴史を積み重ねてきた。

経済分野においても、高い教育力と日本人の勤勉な国民性に基づく高品質の生産力を原動力として、明治政府による殖産興業政策、昭和の高度経済成長期を経て、世界最高水準の経済大国に発展してきた。

しかし 2010 年、中国が経済の分野で日本を追い越し、アメリカに次いで第 2 位の GDP を実現することが推測されている。世界における日本の位置づけは徐々に後退していくことは想像に難くない。

このような環境変化の中で、過去 20 年間の日本人の意識で最も顕著な変化は、「社会に対する悲観的な見方」の急速な浸透であり、それは日本人の「自信喪失」ともいえる現象である。

また、「ひとびとは不幸になる」という悲観的な将来展望を 1/4 程度の人を持ち続け、5 割を超える人が「ひとびとの健康面は悪くなる」と予想している。
※統計数理研究所「国民性調査」より

<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/point.html>

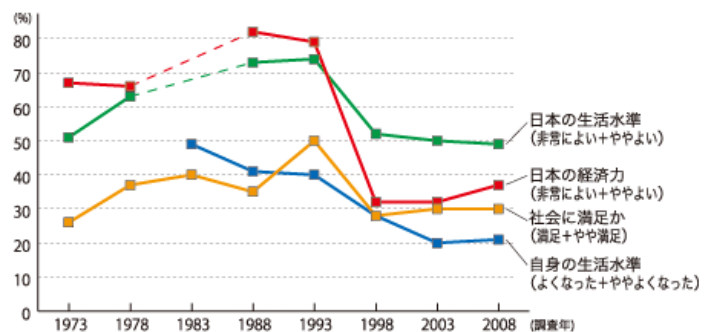


図1:日本の社会経済状況に関する悲観的な評価

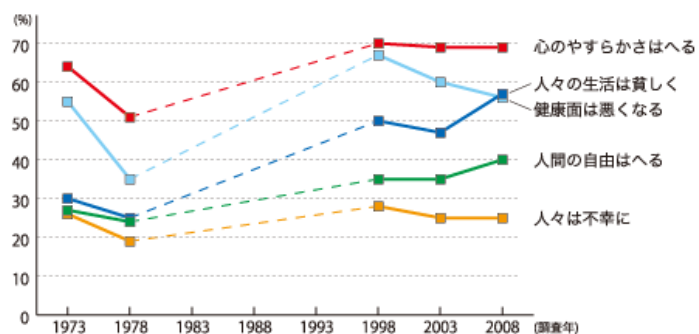


図2:社会の将来を悲観的に展望する意見の推移

政治の役割が「明るく豊かな社会の実現」だと定義するならば、このような閉塞感が充満する状況から国民を解放し、明るく希望に満ち溢れる未来を国民に提示することが我々にとって重要な任務である。

我々は「明るく豊かな社会」を実現することを目的として、周知を集め協議する勉強会「連理の会」を組織する。

ここでは「教育」「健康」「心」をテーマとして、全ての国民が健やかで充実した生活をおくるためのあらゆる手段を模索し、政策として立案、実行する。

「連理の会」の由来について

連理という言葉は、中国唐代の詩人白居易（＝白楽天、772－846年）の長編叙事詩「長恨歌」で知られるようになりました。

「天に在っては願わくば比翼の鳥とならん
地に在っては願わくば連理の枝とならん」

「比翼の鳥」とは一翼しかないために常に並んで飛ぶ雌雄の想像上の鳥を意味し、「連理の枝」とは2本の樹の枝がくっついて木目までが繋がっているもので、一般的な解釈としては、ともに男女がまさに一心同体、極めて仲のよいことをいう譬えとなっています。

しかし、本来の意味は、植物学上の分類での「連理木」であり、同種もしくは異種の複数の樹木が、成長と共に一つに融合していったものを指します。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%A3%E7%90%86%E6%9C%A8>

すなわち、我々のように、生まれなどの先天的資質な異なりを持ち、また生きてきた環境など後天的にも指向性が異なって育ってきた人々が、天に向かって成長する過程において、同一の方向性を持ち、大地に根を張り、太い幹を形成し、力強い一本の大木へと融合していくことを「連理」という言葉で表せるのではないかと考えています。

異なりを認め合い、相互補完しながら、会員全体の成長を実現する組織を「連理の会」は目指します。